

大岡昇平

大岡昇平

新潮社版



日本文学全集 45

大岡昇平

発行／1967年9月15日 十一刷／1969年10月25日
発行者／佐藤亮一 東京都新宿区矢来町71
発行所／株式会社・新潮社 東京都新宿区矢来町71
電話東京(260)1111(大代) 振替東京808 郵便番号162
印刷所／光邦印刷株式会社 製本所／新宿加藤製本所
本文用紙／本州製紙株式会社
函貼／三菱製紙株式会社 製函／文京紙器株式会社
カバー・扉・見返／特種製紙株式会社
表紙クロス／日本クロス工業株式会社

乱丁・落丁本はお取替えいたします Printed in Japan 1967

目次

俘虜記

五

武蔵野夫人

四

野火

一九七

神經さん

三二五

花影

三三九

注解

四三一

年譜

四四一

解説

四五三

遠藤周作

大岡昇平

俘虜記

わがこころのよくてころさぬにはあらず*

歎異鈔

私は昭和二十年一月二十五日ミンドロ島南方山中に、
おいて米軍の俘虜俘虜となった。

ミンドロ島はルソン島西南に位置し、わが四国の半
分ほどの島である。軍事施設として見るべきものな
く、これを守るわが兵力は歩兵二箇中隊、海岸の六つ
の要地に、名ばかりの警備駐屯ちゆうとんをおこなうのみである。

私の属する中隊は昭和十九年八月以来、島の南部お
よび西部の警備を担当した。中隊本部は私の属する一
箇小隊とともに島の西南端サンホセにあり、他の二つ
の小隊は、それぞれ東南ブララカオ西北バルアンにあ
った。サンホセ、バルアン間、つまり、島の西海岸の

全長をおおう約五十里が開けはなたれ、ゲリラが自由
に米潜水艦の補給を受けていた。しかし彼らは攻撃し
て来なかった。

昭和十九年十二月十五日、米軍は艦船約六十隻をも
ってサンホセに上陸した。われわれはただちに山に入
り、南部丘陵地帯を横切って、三日の後ブララカオ背
後の高地で、同地駐屯の小隊と連絡した。米軍はここ
には上がっていなかったが、小隊はサンホセの砲声を
聞き、糧食無線機とともにあらかじめ退避をしていた
のである。糧食はまだ豊富であり、まもなくわれわれ
と合流した附近の水上機基地の海軍部隊、遭難船舶工
兵、非戦闘員を合わせ総員約二百名、三カ月以上を支
えうるはずであった。明けて一月二十四日米軍の襲撃
をうけて四散するまで約四十日、われわれはここに露
営した。

米機は終日頭上にあつたが、米軍はただちに追求し
ては来なかった。「やつらは怠なまけ者だからこんなどこ
までやって来やしないさ。そっちが来なけりゃこっち
だって行かないや。そのうち戦争も終るだろう」とわ
れわれの自分の宿舎となるべき小屋がけ作業を指揮し

ながらある下士官がいったが、これはわれわれの希望のかなり端的な表現であった。すなわち米軍がこの島をルソン島攻撃の中継基地として選んだことが明白である以上、われわれが山中にじっとしていれば、戦いはわれわれの上を通過して、ここは最後までいわゆる「忘れられた戦線」として残る可能性があったからである。われわれのような孤立無援の小部隊のいさぎ得る唯一の希望である。

しかし不幸にしてわれわれはやはり「行かない」わけにはいかなかった。やがてルソン島バタンガス所在の大隊本部から敵状偵察の命をうけ、たびたび十数名より成る斥候が組織され、十日あるいは一週間、サンホセ附近の山中に潜伏して帰った。あるとき彼らは米哨兵に発見され射撃された。

まもなく一箇小隊はサンホセを見はらす高地に移動して分哨となり、毎日彼らが望遠鏡で見た情況を大隊本部に打電した。彼らはしばしば数十隻より成る船団がサンホセ沖を通過北上するのを見、大型爆撃機が多数新設飛行場から離陸するのを見た。かつてわれわれがボートをあやつって魚を釣った湾内には、米内火艇

が引っかいたような水脈を曳いて疾駆していた。

一月にはいり、大隊本部は百五十名から成る斬込隊の派遣を告げて来た。しかし彼らの到着予定日には米軍が東海岸一帯に上陸しており、彼らに乗せた舟艇は以来行方不明であった。もっとも斬込隊はわれわれのあいだではあまり歓迎すべき客とは考えられていなかった。何となれば彼らの到着はとりもなおさず、われわれの中から若干の決死隊を出し、嚮導せねばならぬことを意味したからである。六十隻をもって上陸した米軍にたいする百五十名の斬込隊の成果について、われわれは何の幻想も持っていなかった。

しかしわれわれはその後も無電命令により幾度かブララオに出張し、あるいは到着しているかもしれない斬込隊を迎えに行った。われわれは無人の民家をあらし、たまたま家財を取りにきた不運な住民を拉致して帰った。こうしてわれわれは不本意ながら、だんだん掃蕩される原因を作ってしまったのである。

こうした絶望的情況にあっても、われわれ兵士は比較的のんきであった。われわれはことごとくその年召集され、三カ月の教育の後、前線に送られた補充兵

で、経験の欠如から事態の重大さがピンと来なかった。しかしいくら正確に事態を認識したからといって、いつ来るかわからぬ圧倒的に優勢な相手を、毎日気に病んでいられるものでもない以上、こうした無知はむしろ天が与えた恩恵だったということもできようか。われわれは大部分私のように三十を越して、目前の事態からしいて早急な結論を求めようとはしなかった。

それに山中の生活は最初のうちはそんなに悪いものではなかった。気候はすでに乾季にはいって雨も少なく、暑いのは日中、それも日向ひなただけであるから、着のみ着のままの露營生活には手ごろな陽気である。糧食もさしあたって不自由なく、分隊ごとに疎開分宿したから軍紀もおのずからゆるんで、兵士をかたくるしい軍隊の日常の作法から解放した。われわれはキャンプにでも来たような気持で谷川の水で飯をたき、マニヤンと呼ばれる附近の土民（これは海岸地方に住む一般比島人より色が黒い山人で、戦争に無関心である）と馴れ、赤布、アルミ貨などを与えて、芋、バナナ、煙草たばこなどを獲た。われわれはときどき麓ふもとにくんだり、飼

主を失った牛を射ってその肉を食べた。

しかし災厄は意外なほうからやって来た。マラリアである。

ミンドロは比島群島中最も悪性のマラリアの発生する島だそうである。しかし予防薬をとっていたためか、サンホセにいるあいだは患者は二三名を越えなかったが、山へはいるとき衛生兵がキニーネを忘棄したので、やがて急速に蔓延まんえんし、一月二十四日米軍に襲撃されたとき、立って戦い得る者三十人を出なかった。最後の半月のあいだには大体一日三人ずつ死んでいった。

病人はしずかに死んだ。彼らの急激な意気沮喪せきそうはいちじるしく、そののんきな日常と異様な対照を示していた。

中隊長は毎朝各分隊の小屋を見舞った。彼は小屋に充満している病人を眺め、だまって戸口に立ちつくした。

私の分隊長は米軍上陸直後まだ退路のひらいていたあいだに、しゃにむに北上してルソン島に渡らなかつたことにつき、中隊長の決意を非難する口吻くふんをもらし

た。彼によれば、こんな山の中にいつまでもまごまごしているから、大隊本部からめんどうな偵察の命令をうけ、結局こうして病人がふえて動きがとれなくなつたのである。

下士官のエゴイズムである。しかしこの判断にはルソン島を永久の安全地帯と見なす近視眼的前提がふくまれていた。かつてノモンハン^{*}の戦鬪を見た中隊長が、比島派遣軍の運命についてかかる楽観的予測を抱懐し得たはずはない。

彼は幹部候補生あがりの若い中尉で、二十七歳であったが、無口で陰気で、三十歳より下には見えなかつた。彼がノモンハンで何をし何を見たか、彼は一度も語らなかつたが、その目その顔には現われていた。私は彼のからだにその僚友の死臭をかぐようにさえ思った。「警備隊は警備地区をもつてその墓場と心得ねばならぬ」と彼はいつもいつていたが、私は彼が通り一ぺんの訓示をおこなつていたとは思わない。

彼は米軍に対してわれわれの現在地をとくに秘匿しようとはしなかつた。サンホセから道案内した土民には、慣習に反して食糧を与え歸らしめた。彼の言動に

は一種のあきらめがあり、動作はいわば過度に緩慢であつて、ときどき歯のあいだから押しだすように弱く笑つた。犠牲者の笑いである。

彼は幾分すんで死を求めたようである。サンホセ駐屯中おこなつた討伐戦で、彼はつねに先頭に立つて戦い、決して自分を遮蔽しなかつた。彼は自分では戦争の要請を至上命令として自分に課することを許しながら、それを部下に課することについては自己の責任を感じずにはいられない、あの心のやさしい指揮者の一人であつた。彼らは一般にただ自己の死によつてしか、その部下にたいする要求を正当化する手段を持っていない。

山中で最後に米軍の襲撃をうけたとき、彼は火点観測のため単身前進し、迫撃砲の直撃弾をうけて、一番先に戦死した。おそらく本望だつたろう。

一種の共感から私はこの若い将校をひそかに愛していた。私もまた私なりに、彼とはかなり違つた意味においてであつたけれど、自分の確実な死を見つめて生きていたからである。

私はすでに日本の勝利を信じていなかった。私は祖

国をこんな絶望的な戦いに引きずりこんだ軍部をにくんでいたが、私がこれまで彼らを阻止すべく何事も賭さなかった以上、彼らによって与えられた運命に抗議する権利はないと思われた。一介の無力な市民と、一国の暴力を行使する組織とを対等におくこうした考え方に私はこっけいを感じたが、今無意味な死にかりだされてゆく自己の愚劣をわらわらないためにも、そう考える必要があったのである。

しかし夜、関門海峡に投錨した輸送船の甲板から、下のほうを動いてゆく玩具のような連絡船の赤や青の灯を見ながら、奴隷のように死にむかって積みだされてゆく自分のみじめさが肚にこたえた。

出征する日まで私は「祖国と運命を共にするまで」という観念に安住し、時局便乗の虚言者もむなしく談ずる敗戦主義者も一からげにわらっていたが、いざ輸送船に乗ってしまうと、たんなる「死」がどっかりと私の前に腰をおろして動かないのに閉口した。

私の三十五年の生涯は満足すべきものではなく、別れを告げる人あり、別れは実際つらかったが、それは現に私が輸送船上にいるという事実によって、確実

に過ぎなかった。未来には死があるばかりであるが、われわれがそれについて表象し得るものは完全な虚無であり、そこに移るのも、今私がいやおうなく輸送船に乗せられたと同じ推移をもつてすることができるならば、私に何の思いわずらうことがあろう。私はくりかえし、こう自分に言いきかせた。しかし死の観念はたえず戻って、生活のあらゆる瞬間に私をおそった。私はついにいかにも死とは何者でもない、ただ確実な死をひかえて今私が生きている、それが問題なのだということを知った。

死の観念はしかしこころよい観念である。比島の原色の朝やけ夕やけ、椰子と火焰樹は私を狂喜させた。

いたるところ死の影を見ながら、私はこの植物が動物を圧倒している熱帯の風物を目でむさぼった。私は死の前にこうした生の氾濫を見せてくれた運命に感謝した。山へはいってからの自然には椰子はなく、低地の繁茂に高原性な秩序が取ってかわったが、それも私にはますます美しく思われた。こうして自然のふところであえず増大してゆく快感は、私の最後の時が近づいた確実なしるしであると思われた。

しかしいよいよ退路が遮断され、周囲で僚友がつきつぎに死んでゆくのを見るにつれ、ふしぎな変化が私のなかで起った。私は突然私の生還の可能性を信じた。九分九厘確実な死は突然おしのけられ、一脈の空想的な可能性をえがいて、それを追求する気になった。少なくともそのために万全をつくさないのは無意味と思われた。

明らかにこれは周囲に濃くなってきた死の影にたいする私の肉体の反作用であった。こうした異常な状態にあって、肉体がわれわれをしておこなわしめるものはすこぶる現実的であるが、その考えさすものはつねに荒唐無稽である。

私には一人の仲間があった。滋野はある漁業会社の重役の息子で、私と同年の、妻子のある男だったが、彼は銃後の資本家のエゴイズムに愛想をつかし（と彼はいつていた）その手先たらんよりは前線に出て一兵卒として戦うことを夢みた。彼は内地で教育中、前線出動の可能性をわざと軍に影響をもつ父親に知らさず、自ら内地にのこる手段をたち切っていた。彼の夢は前線の情況を見て破れた。彼はわが軍が愚劣に戦っ

ていると判断し、「こんな戦場で死んじゃつまらない」と思ったといつた。

このことばは私にとって一種の天啓であった。この死をむりに自ら選んだ死とする倨傲が、一種の自己欺瞞にすぎないことに私は突然思いあつた。こんなへんびな山中でなすところなく愚劣な作戦の犠牲になつて死ぬのは、「つまらない」ただそれだけなのである。

われわれは二人で比島脱出の計画を立てた。その計画とはこうである——いづれわれわれが米軍によって現在地を追われるのは確実として、何とか敵中をくぐつて西海岸に出る。そして住民の帆船をぶんどり、季節風を利用して島伝いにボルネオにのされる（このさい私が海水浴場でおぼえた帆走術が役立つはずであつた）。私はボルネオも安全とはいえないから、いっそ南支那海をつち切つて仏印に渡つてはどうかと提案したが、滋野はそれは食糧と航海技術の關係で不可能だから、次善を選ぶほかはあるまいといつた。

帆船が得られなかつたばあい、われわれはふたたび山にこもり、草の根でも食べて休戦を待つのである。われわれは昔読んだ「ロビンソン・クルーソー」の細

目を語りあい、土民に木から火をおこす方法を学んでおいた。

この計画は、いかにも空想的であるが、われわれは、その実現の可能性を少しもうたがわなかった。

われわれはくりかえし計画を検討し、日に三人だれか死んでゆくなかで、墓掘人足のように快活であった（われわれはじっさい墓穴を掘った）。われわれのもっとも身近な敵、マラリアにかかったばあいを考慮し、現在のこった唯一の対抗法、つまり、あらかじめ体力をたくわえることに全力をあげた。われわれは病人のこした粥かかを食べ、土に落ちた飯粒もひろって食べた。

われわれはこうして、あらゆるばあいにそなえて周到に計画していたにもかかわらず、ただわれわれがマラリアで発熱しているちようどそのとき、米軍がやって来ればあいに想到していなかった。

二人とも申しあわせたように一月十六日に発熱した。私は毎日四十度の熱がつづき、二日めに足が立たなくなり、三日めに舌したがもつれた。滋野の症状は私ほど重くはなかったが、熱は三十九度以上出た。

最初の試験しけんが来たのである。私は心に「武器を取れ」を叫んだ。私のからだは強健ではなかったが、病にたいしては比較的抵抗力があるのを知っていた。私は細心に自分の症状を観察し、療法を自分で工夫した。熱のためすぐ下痢がはじまったのを見て、消化器に無益な負担をかけないために（これがそのときの私の考えであった）いっさい食べないことにした。半月ぐらい食わずにいても、体力を維持するだけのエネルギーを貯たくわえてあると、私は自負していたのである。

衛生兵は山へはいつてから奇妙なマラリア療法を發明していた。つまりマラリア患者は水をのんではいけないというのである。私はそれまでの盲従の習慣を一擲なげし、断乎たんぷとして反対した。あらゆる論拠をあげて、禁止の無意味なることを証明した。分隊長は怒って兵士が私のために水をくむことを禁じた。私は他の分隊の兵士が通るのを待ってひそかに頼み、あるいは自分で十間ばかり離れた泉まではって行って水筒に汲んだ。

私は死がマラリア患者を急激におそうのに気がついていた。私はたえず自分のからだの状態を監視し、ま

だ死につつないのを確かめた。病人が死ぬ前に糞便ふんべんを失禁するのを見て、苦痛がはげしくなると、わざと戸口まではいだして小便をして見た。

このあいだに一人同じ分隊の兵士が死んだ。死体は私の胸を越えて運ばれた。分隊の全員が病人であったから、比較的軽い病人が、土葬を手伝わねばならなかった。長らく発熱していて少しよくなったと思われた一人の兵士が、死人の装具を一町ばかり上の中隊本部まで返納にやられた。帰って小屋にはいるとき、私は彼の顔が異様にゆがんでいるのを認めた。翌朝、彼は死んでいた。

この兵士が死んだのは一月二十二日である。私も少し熱がさがり、夕方発病後はじめて少量の粥かゆをとった。その時展望哨が米船三隻のプララカ才湾内に入るのを見たと言えられた。

分隊長は中隊本部へ行き、なかなか帰らなかつた。帰っても不機嫌ふつきげんに横になつたきり何もいわなかつた。われわれは通りすがりの兵士から、ただちに四名の斥候が出たということ聞いた。

翌朝目がさめて小屋の周囲が何事もなく明るくなつ

ているのを、ふしぎな気持ちで眺めたのをおぼえている。私は漠然ぼくぜんとその払眺米軍ふつきやうが来るかなと考えていたのである。その日も一日無事に暮れた。前夜出た斥候は帰らなかつた。私は分隊長に「きょう米軍が来なかつたところを見ると、僕たちは包囲されてるんじゃないでしようか」といった。彼は「病人のくせになまいきいうな」といった。

つぎの日は一月二十四日である。払眺また一組の将校しやうこう斥候が出た。七時ごろ一人の兵士が帰って、一行は麓ふもとで襲撃され、将校は戦死したと伝えた。

分隊長はまた中隊本部に呼ばれ、すぐ帰って、病人は非戦闘員とともにサンホセ方面高地の分哨まで退避する、歩ける者は支度しろといった。そして彼自身も支度をはじめた（彼も少し前から病人と称していた）。私もようやく歩いて便所へ行けるまで回復していたが、分哨まで十五キロの道は自信がなかつた。その先またどれだけ歩かなければならないかしたるものではない。私はついに自分がここで死ななければならぬことを納得した。

分隊長以下十二名中二名が死んで十名である。その

うち私を入れて四名が残った。滋野は行くつもりらしく支度をはじめた。私も外へ出て、何となく小屋のまわりを歩きながら、彼に改めて「おれは残るよ」といった。

彼も大分よくなっていた。彼は私の腋わきの下へ腕を入れ「大丈夫だ。おれが助けてやるから一しょに行こう」といった。私はふと歩けるところまで彼と一しょに行く気になった。私は分隊長に決心を変えたことを伝えた。彼はだまっていた。

各自押しだまって支度をした。別れのことばはかわされなかった。

出発のときになった。私が皆について歩きだそうとすると、分隊長が振りむいて、しかし私の顔を見ないようにしながら「大岡、残るか」といった。私はとっさに私がいかに一行の足手まといになるべきか、私の状態が職業軍人の目にどううつるかを了解した。私は「残ります」と答え、銃をおろした。

滋野はなぜかこのとき先発して私の見えないところまでのぼっていた。そのとき的情況では彼を呼びかえず気はおこらなかつた。こうして私はこの比島脱出の

相棒あいはらうと、さよならもいわずに別れてしまったのである。

この退避組は全部で六十名あまりになったが、二キロばかり行ったところで襲撃され、ちりぢりになった。米軍はこのときすでに完全にわれわれを包囲していたのである。滋野はその晩まで分隊長と一しょにいたが、翌朝落伍らくぶしていたそうである（こういうことを私は後で私と同じ俘虜收容所に来たこの分隊長から聞いたのである。彼は四名の兵士とともに一カ月ばかり山の中をさまよった後比島人にとらえられた。彼はその手に残っていた手榴弾しゅりゅうだんを投げなかった）。

残った者のとるべき行動については、何の命令も与えられていなかった。とにかく各自靴をはき、脚絆きゃはんを巻き戦闘準備をして横になった。

私はこのとき分隊で一番重い病人であったから残るのは当然として、他の三人が出発した連中とくらべて、とくに悪い状態にあるとは見えなかったのは意外であった。

一人は衣川いちがわという大正の講壇批評家の息子で会社員であった。彼はつねづね命令された最少限をおこなうというすこぶる消極的な勤務ぶりを示し、上官の受け

はよくなかった。衣川は珍しい姓であったから、私はあるとき彼に「君は衣川先生の親類かい」ときいたが、彼は「親類じゃねえ」と嚙んで吐きだすようにいった。それは「親類じゃねえ、赤の他人だ」とは受けとれない妙な返事だった。私は「息子だな」と感じたが、その返事が気にいらなかったから追求しなかった。しかしサンホセに米軍が上陸する直前私が最初の発熱をしたとき、彼も足をいためて班内にいたが、飯盒に水をくんで来て、ていねいに私の頭をひやしてくれた。その看護には女のような奇妙なやさしさがあり、彼のふだんの人に馴れない態度とは似合わなかった。私が前の質問をくりかえすと彼はすなおに次男だといひ、問はず語りに彼の父が震災で不慮の死をとげながら後の一家の歴史をこまごまと語った。以来われわれは友人となった。しかし彼は私と滋野の脱出計画を冷笑していた。

彼ははっきりしたマラリアの症状を示さず、仮病じやないかという者もあった。少なくとも出かけた滋野よりはるかにいい状態にあったことは事実である。彼は口をまげて「行つたつて残つたつて同じことさ」と

いった。彼は心はやさしいが、幾分自分をそまつにする男だつたようである。

他の一人は土木師であつた。彼はサンホセ駐屯上官の前でよく働き、しばしば上等兵の勤務をとつた。私は彼を阿諛者としてきらっていたが、山へはいつてもはや序列も昇進も問題でなくなつた後も、依然としてよく働き、すんで重い物などかついだ。そしておそらくそのため分隊で一番先に病人となつたのである。私はこの年になつても、まだ人を見る目に誤りがあるのをひそかに恥じた。彼は熱はもう下がっていたが、多分体が見かけ以上に弱つていたのであろう。

もう一人はおとなしい北多摩の百姓である。彼は行くとも残るともはっきり意志表示をせず、ただ皆が出かけた後で、見たら彼がそこにいたというにすぎない。彼はべそをかいたような顔をして、脚絆も巻かず壁に向いて寝てしまつた。

時刻は残留者がだれも時計を持つていなかつたので、はっきりしたことはわからない。私は通りかかる兵士に飯盒に水をくんで来てもらひ、何度もそれを水筒に詰めようと思ひながら、おつくうで止めたのをお